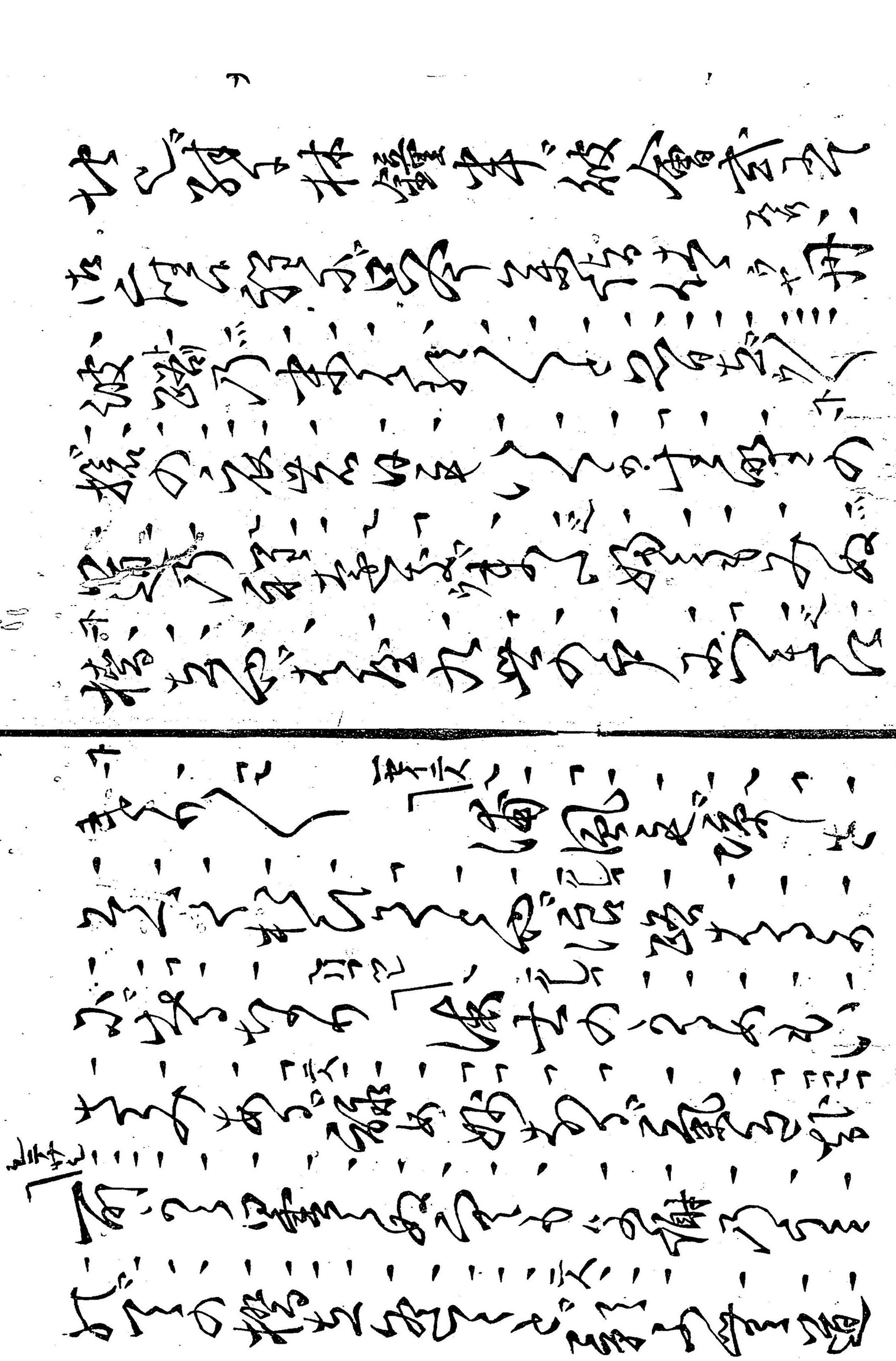
特44
ー女
116

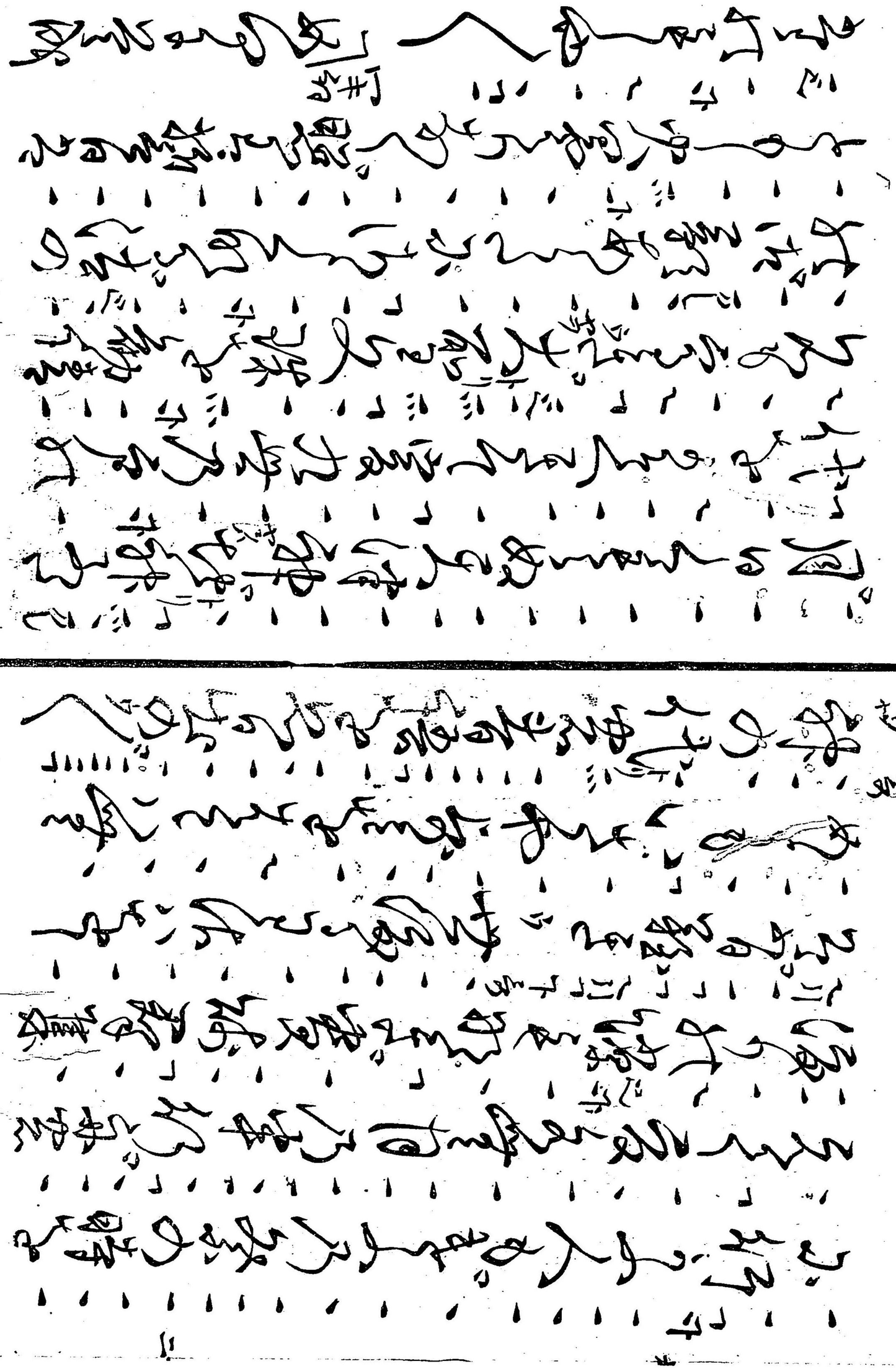
宮内省圖書寮

九世戸　明治十九年十月十九日　山形県庁

謹

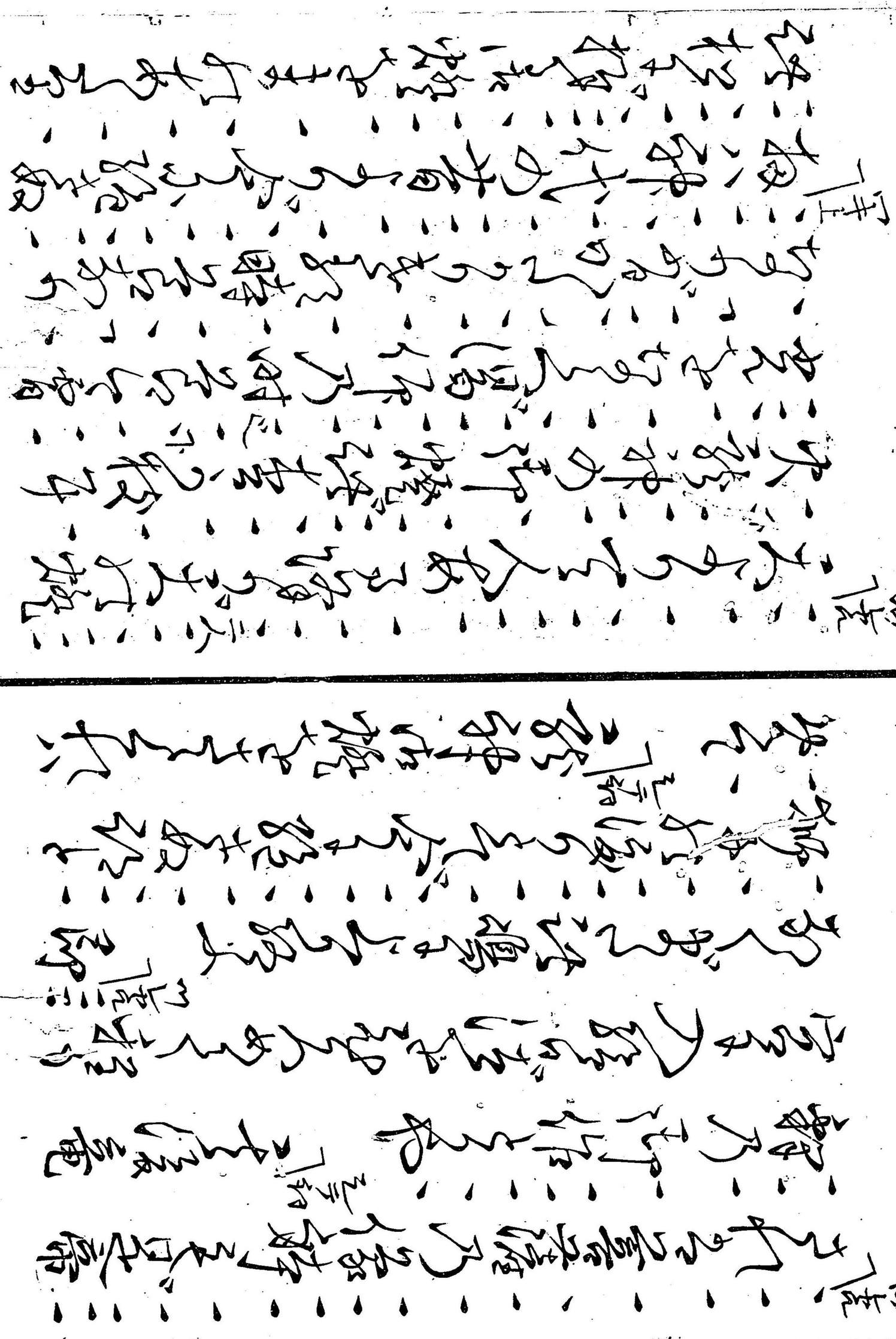
風雅亭を拾遺抄に
[illegible]
道をはげまし給ふ　拾遺抄
又仕へまつる君下也ばも丹後國
九世戸八神代の古跡みて忘れも
天竺五臺山乃文殊を勸請の





先人より尋ねきき事ども
なりとかかりのものなりて
是は都より始めくくに手伝の者也
先祖百姓を九世戸と名付初
彼を責くに付て
しき漁人なれどくかうち

事へきたるにつぶん九世戸を
名付し事なれども天神七代地
神二代の法神ゆえ天くうち
宮ゆくに天竺五葉山乃又珠
勧請し孫へゆえ天七代地の二
代を是九世戸と名付しなり



深まん事こそ有難き　中々
此事は隠もなし澄る月　雲
ます鏡くもらずしてかえるめ
げに旅乃人も浦人も語りきハ
思ひよらずして四方はながめも
面白や松風も音そふくち
しら浪も白妙の月浪の宿る
気しき殊く　大地神
二代の御神婦家よ天降て
末世は誓の海の底に語れ
像をも勅語志めつ　されハ縁
地拜霊乃もつ　まや神まさ

六

あらかね乃ぞゐうちまつりおく
幾宮海度の男波志やうしなし
はうちやうそもんとて三世く
こそおさへ文殊をもる鳴にあ面
志め飯れはちかしたち作らん
御縁かしらさ法るる神の代末

九

きうろ次か毛露務屋宮ま満く
てそやみのてく生しつかきめ
おのちんゆをとのてはお古
とたまれてく國しく松を植のよ
普とそ中乃會まうをつかしふ
お乃をとおうしよのが中置乃祭そて

是を故ある神不和あり上にて
神く集りて明て夜の風
吹て海を立て山乃
文殊と動給へ八重の雲
まつ雲をわけ下り給へ
乃鈴神、舞楽を
始給へ
御燈を打給へ
上にて
うつの日数を神の代乃ぶく昔
うつりきんを
中とまるまは影を松の本
流れ
みしらの神
文殊の風の
ぶるを

待ちたまへ衣は[illegible]あらはさん

シテ 嬉しやさらば[illegible]計[illegible]給へ

浦人の[illegible]なりけりや

ワキ 今は何をかつゝまん我は[illegible]

まことは[illegible]天女[illegible]

前[illegible]ゆきて[illegible]

[illegible]身に清浄の心を蔵し[illegible]

[illegible]とぞ[illegible]緑の松の

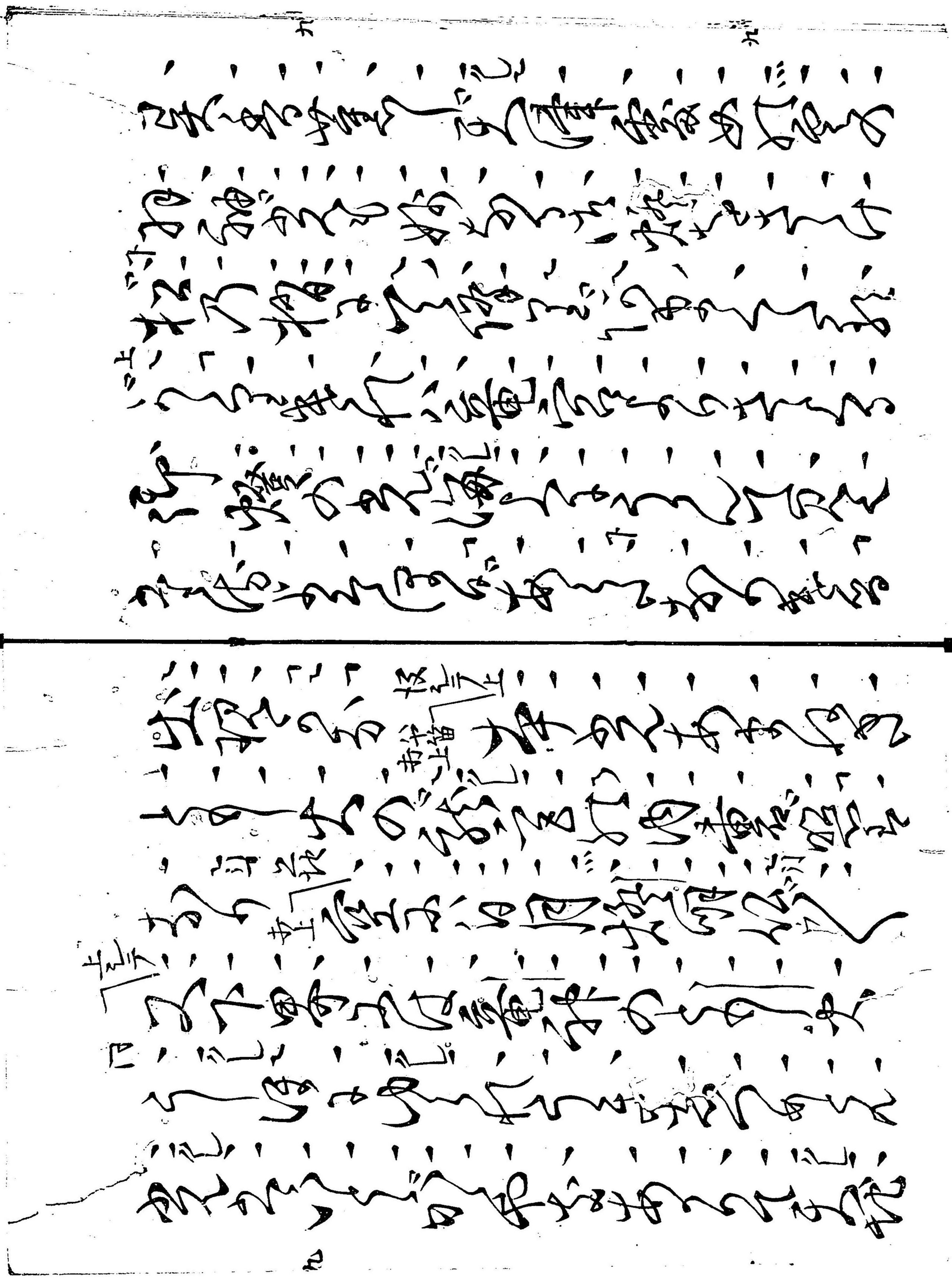
本陰にたちよりて

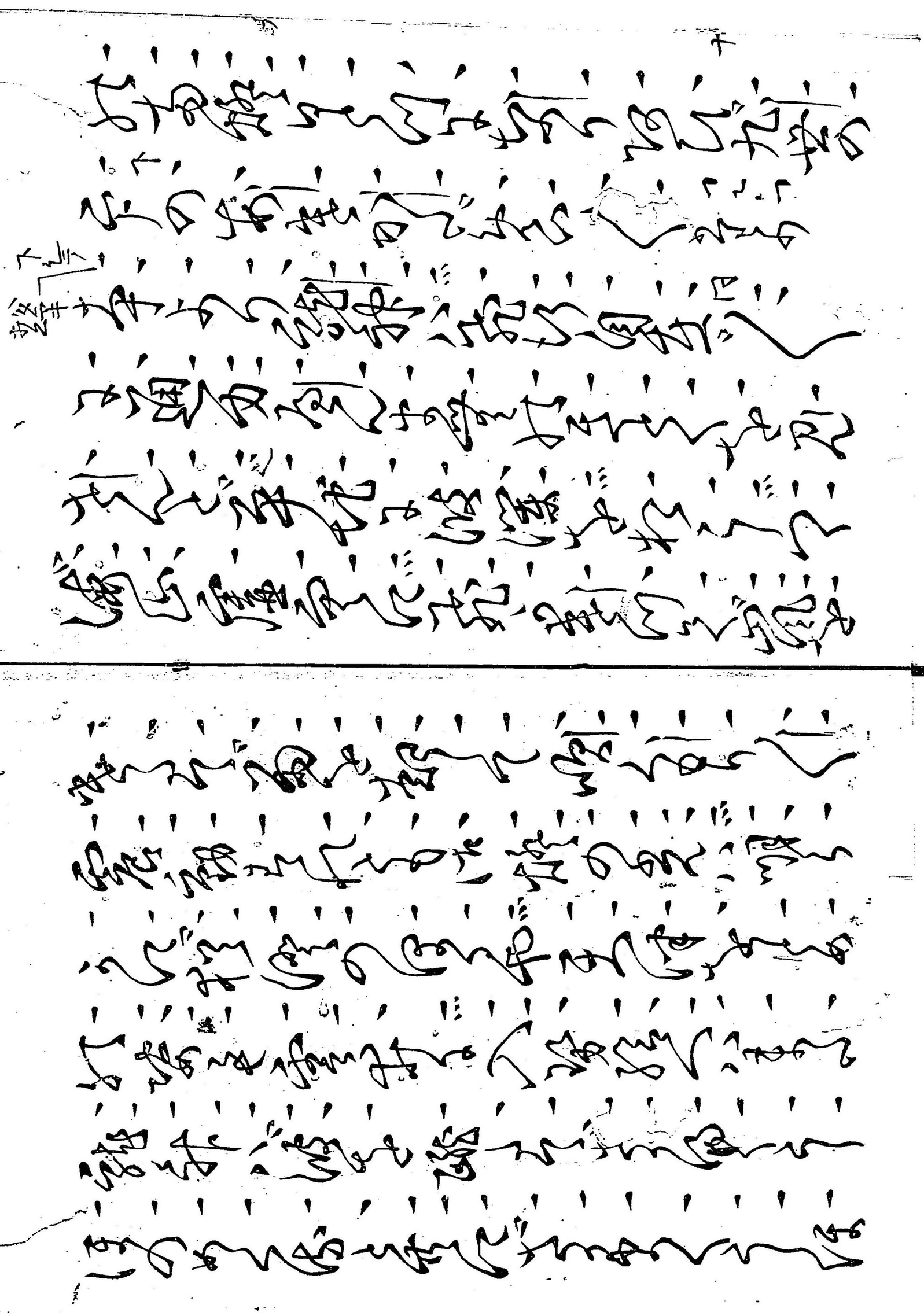
天女上 久堅の

[illegible]の雲[illegible]落ちて

天津[illegible]風[illegible]

天乃羽[illegible]雲[illegible]





明治十九年二月八日翻刻御届
同　年三月　刻成
出版人　石川縣平民　近藤八郎右衛門
金澤區横安江町百九番地
定價金五錢